木下杢太郎全集

第二卷

木下李太郎全集 第二巻　第九回配本（全二十四巻）

一九八二年一月一八日　発行

定価 三九〇〇円

著者　太田正雄

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社 岩波書店
電話 〇三-二六五-四一一一
振替 東京六-二六二四〇

印刷・三秀舎　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 太田元吉 1982　Printed in Japan

目　次

餘燼集……一
餘燼詩稿……三七
拾遺詩集……五五
『食後の唄』〔參考〕……一七一
詩歌草稿……二〇一
後　記……四五三

餘燼集

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

餘燼集目次

唱愁詞曲鈔……五
エロナだより……五
夜の好奇心……八
舞姫……一〇
果園に於けるおとづれの祝日……一二
屍を捜す船……一三
詩集「瑞枝」の序に代へて作者黄嬴君に呈する詩……一六
眞夏の夢……二二
盆栽の松……二三

唱愁詞曲鈔

エロナだより

エロナから一筆、Braの廣場、
南側アルカアド立ち罩め、僕の前には
鍬金の色、Arèneひろびろ。
市を闖りて閒散、目の前にも散歩する人、
或は所謂「カフエエ」の卓に「ジエラチ」を喫する。
遊山の人のうちにもいろんなのが有る。
肥滿の母親とちんちくりんな女中との閒に
氣高げな、だが無邪氣な小女。
定かならぬ禍かのやうに、その額に

そそけ亂れた黑髪が深げに懸る。
姿少しく Perséphone を思はす。

僕はなほ數日この地に滯在する。
Hôtel Ravia San-Lorenzo が僕の宿だ。
下は是れ Adige の河、夜は聽く、褥のうちに、
室深くおとづるる水音を聽く。
昨日は黎明、九月の濃霧が
河岸と近い果園とを閉した。
だが、そいつ、太陽が押し分け昇ると、
幻影かなどのやうに消えてしまつた。
失敬、ちよつとペンを擱くよ。僕のアイスクリイムが
溶けかけたんだ。おやおや。だんだら三色の
カフエエの層はうすいろの牛乳の層と、
桃とワニイルの層と亂れ相鬪ふ。

錫の盆に載せた大きなコップの
凝冷の水日に照りきらめく。
小さい虹その上に搖らめく。時に鄰客
あなや、つと立ち上つた、日とコップとの間に。
その陰忽ち薔薇の光彩を打ち壞した。

だが、もう遲い、僕ももう出かけねばならぬ。
歸りはMazziniの通を行かう。
狹くうねつて車馬通行禁止。
ずらりと商家軒を連ねて、
店頭の好餌ツウリストの心を釣る。
然し人足繁いきらびやかな店よりは
低く見すぼらしい貧肆の方が僕には好い。
田舍びた瓶のうちに手際も拙く投げ入れた
すばらしい花の束をば唯匁五分で賣る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

槐樹に素馨、石竹の花花
葉に包まれてしとやかに映え輝く。
其葉のにほひも花に劣らず。
妙なる薤澤に些しの苦味をまじへる。
柑子、月桂、ジエラニウム、ミルトス
Olea fragans、まんねんろう……僕は花の束から
二枚の葉を取つて、この書に封じて君に贈る。
多分この花の束はGiustiの苑の
黒い大きないとすぎの下で摘まれたのだらう。

(Jean-Louis Vaudoyer. Les Nouvelles Littéraires, 16-6-1934.)

夜の好奇心

梯子段を登る人のうちには

廣い額もあり、特價廉賣で買つた
濕けてそり返つた本など持つもある。
赤毛の逞しげな小女が
戸口に戻つて呼んでゐる。
「只今、Ibelèneなの。」
も一人のむすめは水水しい目、
いそいそとその住居に入つて行く。
市外から歸つて來たのだが、そこの暗い仕事が
背筋を曲げさせたのだ。
椅子に坐つて靴を脱ぐ。
薄い靴下からちぢかまつた
小さい趾の形がはつきり見られる。
それから白いコルサアジユ、毛編のジユウプで、
さも樂しげに横に寢臺に轉んで、
耳をすり著けて懸命に聽く、下の階から

登つて來る男の重い聲を。
エストミンスタアの時計の鐘が時折
好い音を出すころになると、その男が子供に本を讀んで聞かすのだ。

(Léon Follain. Les Nouvelles Littéraires, 11-8-1934.)

舞姫

繁き接吻で脣は青ざめ
長い睫毛の目は燃え輝く、
鳶色のわかい女、
魯西亞だらうか、伊太利亞人か。

廣野のほとり、女は踊る。
八月の宵である。明星が光る。

夜の鶯顫音を擿げる。
森の木木微醺の氣を吐く。

われは涙して、女に幸あれと唱ふ。
果して是れ酷きSalomeのたぐひか。
化粧へるは是れ柔婉曲媚。

廣野には月の影あまねく
美しき宵にたもとほりつつ
鳶鳥の女は踊る。

(Jean Soulairol. Les Nouvelles Littéraires, 15-9-1834.)

果園に於けるおとづれの祝日

兩の手に鳥を握つていつしかにうちまどろうだ、
指先でその溫い小頸を打ちつつ。
夕立に青い林檎の香はただよひて、
草のうちに翼振はす、逃げも能はず。
失ひし御主待ちつつも樹の幹のうつろに眠る。
御主來り給へば小禽亦身じろぐこと少し。
露なる御足のうへに迸る星くづ押し分け、
輝しき酸模の閒に吹き上ぐるエエテルの嵐のうちに、
振り敷ける大いなる珠に到り著きたまうた。
物御尋する閒もあらず。唯だ御顏に咫尺したのだ。
光明の寂寞のうちに、

あなや忽ち永久は破れた。一瞬——
何の用意も有らばこそ。そして小鳥は死んだ。
開けた手の平にまだぬくみを殘して。
さむしい廣野に清泉うち響ぎ、
聖き血しほの滴すぐりの叢にうち散る。
わたくしは聽いた、星宿の曲り目に接する
大路はるか御足の離り行くを。

(Claudine Chonez: Visitation au verger. Les Nouvelles Littéraires, 22-9-1934.)

屍を捜す船

雪空は暮れかける。
沖の船は小さい。
「最後の死骸がまだ見付からない。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com